「倉の中の思い出」

一般教科　土屋　紀子

私は読書はどちらかと言うと好きな方だが、熱中してしまうタイプなので、本を読み始めるといつも途中でやめられなくなり、他のことができなくなってしまうため、なかなか大変である。しかし、子供の頃から本は私にしばしば力や勇気を与えてくれた大切な友人で、本について聞かれるといつも思い出すのが、子供の頃に親に隠れて読書をした、倉の中での楽しいひとときである。

私の出身地は静岡県の三島市という所で、富士山がきれいに見える所である。私が生まれた家は、砂糖問屋を経営していた父が商売に失敗してしまい、売らなくてはならない羽目に陥ったため、現在は人手に渡っているが、今から考えてみるとかなり大きな家で、米倉と言われる大きな倉が三つもあった。

どの倉も、いつも重い戸で閉められていて中は暗かったが、私は「しーん」と静まりかえった倉の中に忍び込むのが好きで、小学校の頃、時々親に隠れてはその三つの倉に入ってよく探検をしたものだ。

三つの倉の内、二つの倉は普段はあまり使用されていないようだったが、残りの一つの倉は商売のため、当時も頻繁に使用されていた。かなり大きな倉で、一階には売り物の大きな砂糖の袋や小麦粉の袋が積み上げられており、二階には先代の使わなくなった物や衣類、本等が山のように収納してあり、なんとなく暖かみのある場所であった。私は時々、親に見つからないようにこっそりと重い倉の戸を開けてはこの倉に侵入し、そっと二階に上がり、二カ所にあった重い戸の付いた窓を開け、窓から差してくる太陽の光の中で夕方暗くなるまで昔の字（大正か昭和初期の文字）で書かれた本を読んだものだ。変な形の字が多く、分かりにくい部分も多かったが、それらの本は、私が生まれる前に亡くなった祖父か伯父かが読んだもので、日本の文学はもとより、世界文学全集まで何でも揃っていた。いろいろあった本の中でも、シェークスピアの「リア王」を真剣に読んでいたのを今でも覚えている。多分、自分が三人姉妹であったから、その物語の中の三人のお姫様に興味をもったのかも知れない。

今考えてみると、倉にあった本は現在でも有名な文学ばかりであったが、多分その本が売られていた時代には、まだ書物が普及していない時代であったから、そのような本しかなかったのかも知れない。書かれている字が昔の字なので、一見難しそうな感じの本ばかりであったが、内容は子供の私でも理解しやすい本ばかりであった。

その後、倉は壊され、家を売る時にそれらの本達もゴミと一緒に捨てられてしまった。現在はその土地は他人の物になっているが、倉で過ごした子供時代

は、今でも私の子供時代の楽しい思い出のひとときとなっている。
　私は読書にふける等というのは活動的ではないかも知れないとも思う。しかし、本というのは自分が判断に困った時や窮地に陥った時、何か解決のヒントを与えてくれたり、色々な人生の生き方を教えてくれる大切なものだと思っている。人生には色々なことがあり、楽しい時ばかりではない。いらいらしたり落ち込んだり、深刻に物事を考えなくてはならないことも多い。そんな時、いつの日も、密かに私を励ましてくれるのがいろいろな本達なのである。